種と環
たねとわ
みやぎ県南地域づくり実践塾
伊達ルネッサンス塾
http://www.daterenai.com/

種に光と栄養を
あげると、
人の輪が環になる。

土の下には、色も形も大きさもさまざまな無数の種が眠っている。
種は芽を出すために必要なものを自分の中に持っていて、
自分で細胞を増やし、からだを大きくしていくけれど、
その先はそれだけでは足りない。
頭上から降り注ぐ光と、足もとの土が運ぶ栄養が要る。

茎と葉を存分に伸ばすことができた種は、やがて花を咲かせ、実をつける。
庭に開いた花の輪はそれぞれに美しく咲きそれぞれに散っていくけれど、
街に咲いた人の輪は、光と栄養しだいで「環」になる。
みんなが響き合い、つながり合い、活かし合う「環」をつくるには、
どんな光と栄養が必要だろう？

伊達ルネッサンス塾の舞台は、日本によくある「地域」。豊かな自然と、そこに住む人が育ててきた文化があります。しかしこれらの地域は、時代の変化に喘いでいます。その中でどう人を活かし、幸せに暮らすか。そのお手伝いをするのが、「地域づくり実践塾」伊達ルネッサンス塾です。

自分の想いを形にして、この地域で未来に向けてチャレンジする人を育てる。それが伊達ルネッサンス塾です。

「もっと○○すれば、楽しくなるのではないか」「いつかは、○○してみたい」。
多くの人が胸に秘めている「想い」は、表に出ずに消えてしまうものがほとんどかもしれません。
でももし、その「想い」を後押ししてくれる仲間がいて、チャレンジできる環境があったら？きっと未来が楽しみになってきます。
伊達ルネッサンス塾が目指すのは「**個人の能力や個性を活かして、暮らしたい地域や生きたい未来を自分たちでつくる社会**」の実現。
そのために、一人ひとりがチャレンジし、お互いに支え合う場をつくるのが、伊達ルネッサンス塾です。

伊達ルネッサンス塾のACTION

1 想いを
チャレンジにつなげる
プログラムの提供

2 一人ひとりの想いと
チャレンジが連鎖し続ける
環境の創出

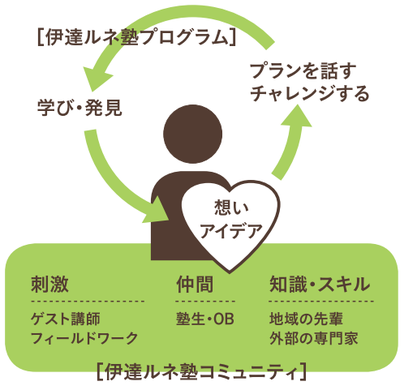
《塾長紹介と全国の地域づくり実践塾》

伊達ルネッサンス塾の塾長である尾野寛明は、2011年に島根県雲南市で「幸雲南塾」を立ち上げた後、各地で「地域づくり実践塾」の立ち上げに関わり、2016年度には全国16箇所で講座が展開されています。「自分の生きる地域を自分の手でつくる」ことを志す若者の熱気が日本列島にじわじわと広がっています。

塾長　尾野寛明

埼玉県出身。一橋大学在学中に古書販売で起業し、2006年に島根県に本社を移転。同雲南市で障がい者雇用事業もスタートさせ、2014年に過疎地で全国初の就労継続支援A型事業所として認可された。2011年より「無理しない地域づくり」をモットーに人材育成塾の立ち上げ・運営に関わる。アエラ2012年1月2・9日合併号「日本を立て直す100人」掲載。

※2016年度実績



伊達ルネッサンス塾の塾生は、約半年をかけて自分が地域で実践したい「マイプラン」を練り上げ、最終発表会でプレゼンテーションします。ここで大切なのは、「マイプラン」そのものの精度よりも、その過程を通した成長と仲間づくりにあります。半年間、真剣に自分と地域と向き合うことで、

- **想いを他者に語る（他者を通して自分を知る）**
- **小さなアクションを起こす（自分の中に芽生えた想いを行動に移してみる）**
- **チャレンジで得た発見や学びを次のアイディアに活かす**

というサイクルの中に身を置くことができます。
この地域で生きていきたいと思う人たちが複数でこのサイクルを回し、支え合うことで、個人の個性や能力が磨かれ、暮らしたい地域や生きたい未来を自分たちでつくろうとする人の輪ができ、無限に広がっていく。伊達ルネッサンス塾はそんなことを目指しています。

セミナーでは一人ひとりプランを発表し、聞いている人からフィードバックをもらいます。

ゲスト講師から地域づくりの先進事例の話を聞いたり、OBの体験談を聞くことも。

座学だけではなく、地域に飛び出すフィールドワークで具体的な活動をイメージします。

伊達ルネッサンス塾年間スケジュール

第1回 START
自分を掘り下げよう
今までどんな風に生きてきたのか？何に影響を受けたのか？なぜそのプランをやりたいのか？自分の中身を徹底的に掘り下げます。

→ **第2回**
ビジョン・ミッションを描こう
自分が目指す未来像（＝ビジョン）と、そのために自分が実現すること（＝ミッション）を、他の人にも伝わる言葉で表現します。

→ **事例視察**
地域でチャレンジしている先輩の現場を訪ねます。

→ **第3回**
プランを具現化しよう
いつ・どこで・誰と・何を・どうやってやるのか。これから実施しょうとするプランの内容を具体化します。

→ **リサーチ**
自分のプランの参考になりそうな事例をリサーチします。

→ **第4回**
アクションを起こそう
プランの概要が決まったら、できる範囲で小さなアクションを起こします。その結果をもとに、プランをブラッシュアップします。

→ **実行**
ここまで来たらスモールステップを踏んでみます。

→ **第5回**
自分だけのマイプランへ
ここから先は、ひたすら自分のプランを磨きます。聴く人の共感を集め、実現性を高めていくために、納得いくまで修正します。

→ **追い込み ブラッシュアップ**
魅力的なプレゼンテーションにするためラストスパート！

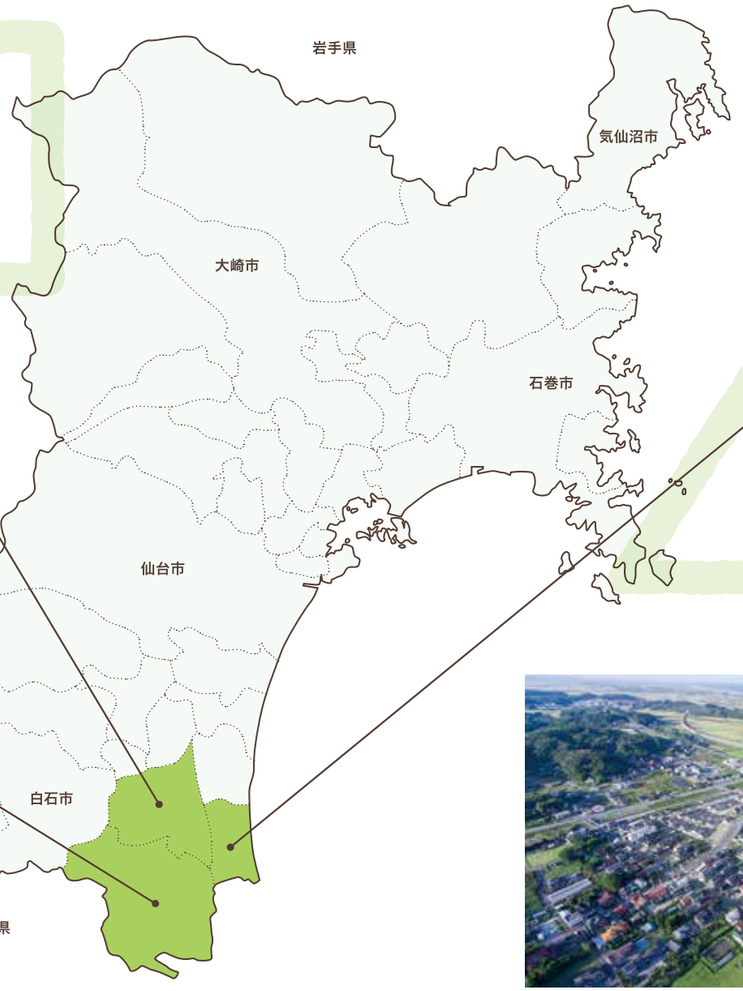
→ **第6回** GOAL!
最終発表会
半年間一緒に歩んできた仲間や地域の人たちの前で、練り上げたプランをプレゼンテーションします。

伊達ルネッサンス塾の舞台、
○森、△元、□田。

宮城県の、仙台より南側の地域をざっくりと「県南（けんなん）」と呼びます。
伊達ルネッサンス塾の主な舞台となっているのは、県南地域の中でも最も南東寄りの丸森、山元、角田の3市町。
宮城県の「南の外れ」で決して便利とは言えないところですが、そんな地域だからこそ、
大都市・仙台に頼りきりにならない、独立したそれぞれの個性が光っているのです！

角田市
農業と宇宙のまち

四角い田んぼが広がり、田んぼの向こうに蔵王山を望む美しい景色が見られます。米のほか、牛乳、肉用牛、豚、鶏卵、果樹、園芸など幅広い農畜産物が生産されています。昭和40年に科学技術庁「航空宇宙技術研究所角田支所」が開設された「宇宙のまち」でもあります。



丸森町
人と自然が調和する里山

阿武隈山地の支脈に囲まれた丸森町は、その名の通りに森で丸く囲まれた町。山と森がもたらす恵みを活かして、干し柿や筍の生産が盛んです。抜群の自然環境に魅かれて移り住んだ人も多く、キャンプや川下り、滞在型市民農園などのアクティビティも用意されています。

山元町
山と海の文化が共存

西側は南北に延びた山とそのふもとのまち、東側は海まで広がる海岸平野で構成される町です。山側ではりんごなどの果樹、海側ではいちごのハウス栽培とホッキ貝などの漁が行われています。「まちは自分たちで良くする」という考えで盛んな活動が見られる町でもあります。

東日本大震災での被害について

2011年3月11日の東日本大震災では、海を擁する山元町では死傷者700人超、約3300棟が全半壊。丸森町の南部は、福島第一原発事故の影響で農産物の出荷停止や観光客の減少に見舞われました。3市町とも震災以前から過疎化が問題となっていましたが、震災の影響で拍車がかかり、住民の流出や町の再編、高齢化への対応など、多くの地域課題が存在しています。しかし震災があったからこそ、大切なものに気付くことができたのもまた事実。本当に大切なものは何か見極めながら、ここにしかない幸せな暮らしを築き上げようと懸命に生きる人たちがいます。

《県南地域について》

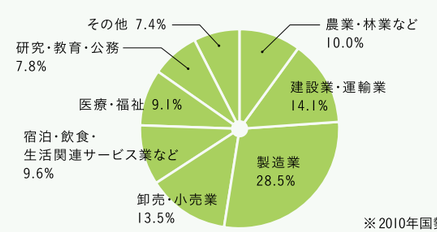
西部は蔵王連峰の裾野に広がる丘陵地帯で、東部は阿武隈川・白石川が流れる平野部。総面積に占める森林の割合が約70%。北東部は仙台都市圏に隣接している。気候は比較的温暖。古くから街道や水運による交通の要衝で、東北新幹線・東北本線・阿武隈急行線、東北自動車道・山形自動車道といった交通網が整備されている。

人口データ

	丸森町	山元町	角田市
総人口	13,984人	12,314人	30,193人
世帯数	4,551世帯	4,425世帯	10,398世帯
人口密度	51.2人/㎢	190.7人/㎢	204.7人/㎢
人口増減率	△9.8%	△26.3%	△3.6%

※ 2015 年国勢調査
※ 人口増減率は 2010 年→ 2015 年
※ 山元町の人口減少率が大きいのは、2011 年の東日本大震災における津波被災の影響と考えられる。

産業別就業人口割合（3市町合計）

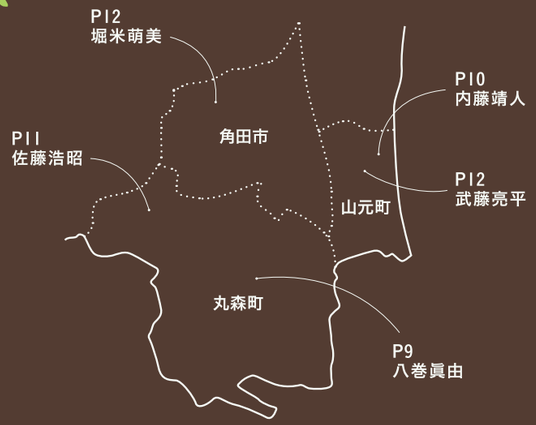


※2010年国勢調査

OB紹介

ここで幸せに生きる道、絶賛探求中！

伊達ルネッサンス塾を修了したOBは、
それぞれの場所で自らの「マイプラン」を実践しています。
実践する内容は最終発表会でプレゼンしたものと
同じ場合もあるし、全く異なることもあります。
それは、何より挑戦者であるOB一人ひとりが
常に成長の途上にあるから。そして、地域の仕事は
人と人のつながりで展開していくものだからです。
確実に言えることは、地域の中でそれぞれが思い描く
「自分の役割」をつくろうと奮闘し、
その先に「自分の居場所」を獲得していっていること。
こうして地域に深く根を張る若者がいればこそ、
町の未来が開けていくと伊達ルネ塾は考えます。



Iターン2世として、
愛される地域をつくる
丸森女子！

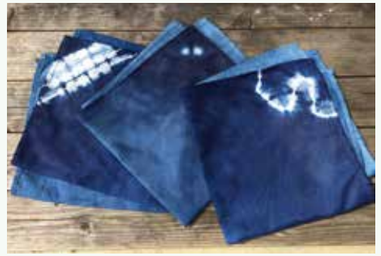
丸森町

暮らしたい地域を自分の手でつくりたい

藍染作家　八巻眞由 _ 24歳

PROFILE
岡山県生まれ、丸森町育ち。父の藍染工房を18歳から手伝い、2016年に藍染ブランド「がらん」設立。伊達ルネ塾で発表したプランは「Iターン2世が考える地域と挑戦」。

3歳の時、一家で丸森町のはずれに移り住み、両親が藍染工房を始めた。小さい頃から「うちは外からきた移住者だ」と意識して育った。10代になると、ジュニアリーダーとして地域活動に熱中した。普通の女子中高生として都会を羨んだこともあったが、自分の育った丸森町が好きだった。高校を卒業すると友人たちは都会へ旅立っていったが、この地で両親が必死で築いてきたものを見つめ、地元に残ることを決めた。町の生涯学習課や復興支援員の仕事をしながら、青年団を立ち上げ、リーダーも務めた。23歳になり、一念発起して藍染ブランドを立てた。伊達ルネ塾修了後は事務局も務めている。惰性ではなく前向きに地域で生きることを考え続けてきた。ここにしかない価値をつくり、同時に、道を切り開く仲間を増やしていく。悩み苦しむこともあるが、その分一歩ずつ着実に前進している。



藍は生きもの。その時々の気候などで風合いが変わるのが醍醐味。藍と対話しながら、自分の感性で一つ一つ手を使い染め上げる。

おしゃれにも気を使う、注目のニューノウカー！

山元町

地方移住を目指す若者のロールモデルになりたい

農家　内藤靖人 ＿ 31歳

PROFILE
埼玉県出身。東京で営業マンなどをしていたが、2013年に移住・新規就農。伊達ルネ塾で発表したプランは「ニューノウカーズヴィレッジプロジェクト」。

震災後、東京からボランティアとして通い、山元町に強く魅かれた。人の温かさ、自然の恵み。何より、都会に暮らす若者には地方で自分らしく生きたいというニーズがあると感じた。自分が第一人者になろう。昼夜を問わず働いてお金を貯め、2013年に移住・新規就農。それまでの人生で農業を志したことは無く、何一つ分からない状態からのスタートだった。既存の農家が作っていない野菜を作れば注目を集めることができると考え、ニンニクやマコモダケを植えた。目論見が当たり、収穫した作物は好評。メディアの取材をたびたび受けるようになった。町内の洋菓子店では内藤のニンニクを使った商品が登場。まだ全体の収益は安定せず試行錯誤の日々だが、確実に自分の居場所を作った。2017年には彼のつながりで新たな就農者が山元町に来る。無謀に思えた挑戦が、実を結びつつある。

上）マコモダケはイネ科の多年草の根元部分。タケノコのような食感。下）内藤のニンニクを使い商品開発されたキッシュ。

同じ価値観を持つ人とつくる、自分らしい仕事

丸森町

自然の中で本に触れる、心豊かな暮らしを提供したい

古書店店主　佐藤浩昭 ＿ 48歳

PROFILE
生まれも育ちも丸森町耕野地区。2015年、消防署を退職し、自宅を改装して古書店を開店。伊達ルネ塾で発表したプランは「ロバのいる（小さな）古本屋」。

佐藤の生家は人口700人ほどの集落にある。消防署に就職し、救急隊員として仕事を誠実にこなしたが、40歳を過ぎた頃から、働くことの意義を自らに問うようになった。そんな折に両親が他界。この先の生き方を模索する最中に妻と出会った。「同じ価値観を持って生きていける」と感じ、結婚を決意。この先の人生で自分自身を最大限に活かすため、高校時代から好きだった本に関わる仕事をしようと退職した。伊達ルネ塾では「ロバのいる古本屋」というコンセプトを貫き通し、修了後約10ヶ月で「スローバブックス」を開店。築90年の自宅を改装し、ロバ小屋も作った。月に数回ののんびり営業だが、訪れた人は「落ち着く」といって長く滞在する。妻がこよなく愛するロバはまだやってこないが、「本で人と自然と地域社会をつなぐ」というミッションに向け、二人三脚で歩みを進めている。

上）スローバブックスのアート部門は妻の路代さんが担当。下）かつて養蚕農家を営んでいた佐藤の生家は築90年の古民家。

「私」と「地域」を認めたら、可能性が見えてきた

角田市

地域に救われたという実感が原動力

産直市場店員　堀米萌美 ＿ 24歳

PROFILE
角田市西根地区に生まれ育つ。優等生→引きこもりを経て自分を肯定し、地元を楽しくするべく働く。伊達ルネ塾で発表したプランは「出会いのマルシェ」。

もともと真面目な性格が自分自身を追い詰める結果となり、高校１年の５月から約５年間、引きこもり生活をした。だがその間に友人に誘われて隣町の青年団に加わり、地域と関わり、仲間とともに物事を作り上げる経験をした。同じ友人に誘われて伊達ルネ塾に入ったものの、自分の未来を描けずもがき苦しむ。だがその葛藤の中で、生まれ育った地域を肯定することは自分を肯定することだと気づいた。自分を認めることができた今は、地元で人と農と食をつなげるべく働く。湧いてくるいろいろなアイディアを、仲間とともに少しずつ形にしている。

農産物が豊富な角田。地元のものを顔の見える関係で食べてもらいたいと思い、丁寧な接客を心がけている。

楽しいことを住民と一緒に。そんな役場職員でありたい

山元町

公務員　武藤亮平 ＿ 35歳

PROFILE
仙台市出身。民間の職を転々とした後、山元町職員に。伊達ルネ塾で発表したプランは「楽しく地域のことを考えよう」。

昔から堅苦しいことは好きではなく、楽しいと思うことを選んできた。仕事もいろいろしたが、あまり長く続かなかった。だが東日本大震災を目の当たりにし、被災地で仕事をしたいと思った。山元町職員の採用試験を受け、合格。「まずは住民と仲良くなることだ」と考えた。伊達ルネ塾受講中に県南の美味しいものなどを集めた「山元はじまるしぇ」を企画。多様な関係者の調整に胃を痛めたが、「俺がやるんだ」と覚悟を決めた。結果は大成功で、２回目も規模を拡大して開催した。「楽しくないことはやらない」。こういう役場職員に会うと、希望が持てる。

武藤が企画・運営した「はじまるしぇ」。町内外から多数のブースが出展し、老若男女が集まる。

優しく照れ屋な役場職員が、山元町を楽しくする

伊達ルネ塾効果、じわじわ増殖中！

毎年数名の受講生が半年間かけて「マイプラン」に取り組むうちに、共感・応援する人たちがじわじわ集まり、そのネットワークから新しい事業や活動が立ち上がっています。頑張ろうとする人、チャレンジしようとする人が見えるようになってくると、その熱が周囲にも伝わって、地域全体のエネルギーが増大していきます！

	1期 2014年度	2期 2015年度	3期 2016年度
受講者数	9	8	7
受講者が始めた活動や立ち上げた事業の数	12	7	4
継続中の活動や事業（のべ数）	10	15	18

※2016年度については12月現在

伊達ルネ塾受講生により始まった活動・事業・イベント等（抜粋）

飲食系イベント

- ○ こうやのあるきマルシェ（丸森町）
- ○ 耕野まちセン喫茶（丸森町）
- ○ 山元はじまるしぇ（山元町）
- ○ 郷土料理の出張屋台活動（山元町）

文化・福祉・交流

- ○ 古書店「スローバブックス」開店（丸森町）
- ○ 読書会（山元町）
- ○ 「モンスーンの風を訪ねて」企画展（角田市）
- ○ 玄関前写真展（角田市）
- ○ 徘徊ウォーク（角田市）
- ○ ヨガ＋地域「浪板海岸再生プロジェクト」（岩手県大槌町）
- ○ 出張ハーブ演奏会（福島県伊達市）

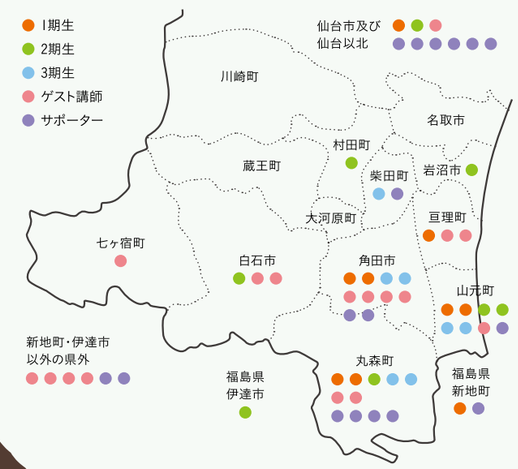
拠点整備

- ○ 商店街活性化施設「やました幸街堂」開設事業（山元町）
- ○ 地域交流拠点「なわっしょ」開設（山元町）

商品化・サービスの事業化

- ○ Made in Marumoriのブランド化（丸森町）
- ○ 藍染の六次産業化事業「あいづちプロジェクト」（丸森町）
- ○ 農産物を用いた地元事業者との共同商品開発（山元町）
- ○ 中学生不登校児支援（角田市）
- ○ フェアトレードコーヒーの商品化プロジェクト（角田市）
- ○ 地場産品を使った「はま道弁当」の商品開発と販売促進（亘理町）

伊達ルネ塾ネットワーク



伊達ルネ塾ってどんなところ？ OB＆現役塾生座談会

伊達ルネッサンス塾では、年齢も背景も職業もさまざまな人たちが
お互いに刺激し合いながら一緒に学んでいます。
実際の現場ではどんなことが起こっているのか、OB と現役の塾生に語ってもらいました。

3期現役塾生
菊地るみ（37）
人が集まるところ
どこへでも！な介護施設職員

I期OB
小笠原有美香（33）
千葉から移住！
発酵食品大好き女子

I期OB
細川修（31）
地元密着学習塾の
さわやか講師

2期OB
庄司亮一（38）
美大卒の介護施設職員

3期現役塾生
関根孝幸（39）
脱サラランナー＆
タロット占い師

「おいお前大丈夫か、何ジジイみたいにしなびてんだ」と刺激になる

事務局　伊達ルネ塾に入った理由と、実際に入ってみてどうだったかを教えてください。

関根　私はもともと山元町出身なんですけど今は住んでいなくて、町外から町を見た時にどんどん廃れていくのを感じて、何か自分にもできることがあるんじゃないかと思っていたんですね。そんな時に偶然伊達ルネを知って、自分の地元で面白そうなことをやってるぞと。伊達ルネがあることで山元に行く機会が増えたという

か、帰って来れるきっかけを与えてくれています。それに、脱サラして最初は「自分一人で仕事をしていくぞ」っていう気持ちだったんですけど、実際には一人ではできなくて、伊達ルネのおかげでたくさんの人に支えられていて（※1）感謝してます。

細川　僕は、もともと自分が通っていた塾でアルバイトを始めて、それからずっとそこで働いているので、他のことを何も知らないんです。だからこれを機会に、これまで知らなかった人と会ってみるのもいいかなって。僕は仕事から帰って来るとバタッと寝てしまって他に何もできないんですけど、仕事以外に地域の活動にたくさん参加してるような「心のスタミナ」がある人に会うと、自分に対して「おいお前大丈夫か、何ジジイみたいにしなびてんだ」って刺激になるのが一番良かったところです。

小笠原　私は Facebook で情報を見て、「地域づくり」とか「若者」という言葉に敏感に反応して「ああ、若者がいるんだあ〜！」みたいな（笑）

事務局　若者に飢えてたんですね（笑）

小笠原　復興支援員として就任したばかりで、孤独感を感じていました（笑）

庄司　僕はおがちゃん（小笠原）に誘われて、一般聴講で聞きにいきました。けっこうみんな一所懸命に「〇〇やりたい」とか言ってて「熱いな」って感じで、最初は正直引いてたんですけど（笑）でも伊達ルネに来てる人たちは話しやすくて、だんだん面白くなって。塾生に自分から手を上げるつもりはなかったんですけど、事務局の方に猛プッシュされて（笑）そんなに言ってくれるんならやろうと。

菊地　3年くらい前、仕事以外に何かやりたいなって思っていた頃にちょうど伊達ルネが出来て。面白そうだったのでお手伝いとして関わるようになりました。そしたら塾生や事務局のみなさんが楽しそうで。だからもっと深く関わってみたいなと。それにプラスして、自分のほかの地域での活動をまとめるとか、自分が前向きに変われたらいいなっていうのもあったので。

細川　伊達ルネに入るのが、手段じゃなくて目的だったんですね。

小笠原　私は楽しいというより「大変そう」と思わせてしまったんじゃないかと思うんだけど。塾生のとき、セミナーが近づくたびに苦しんでたから。

菊地　みんなと一緒に悩んだり考えたりしたいなと思って。塾生になって、みんなが私のことを考えてくれるだけで最高に楽しい。さらに自分の活動もまとめられて、いいことしかないです。

自分を追い込むからこそ得られる達成感

事務局　（OB に）最終発表会までやり抜いた感想や体験談を聞かせてください。

細川　どうだったかな…

菊地　現役塾生は目をキラキラさせて聞いてますよ（笑）

庄司　僕は本当に最後に追い込みのダッシュで駆け込んだ感じでしたね。

事務局　庄司さんは最終発表会で他の誰よりも、それまでの内容と変わりましたよね（笑）

庄司　5回目のセミナーまでずっとモヤモヤしたままだったんですけど、1ヶ月くらい前に事務局の人たちが声をかけてくれて、僕の仕事帰りに合わせてファミレスでじっくり話をしました。そこでたくさん想いを吐き出したのが、すごく心地よかった。

細川　話の引き出し方が上手ですよね。

庄司　とにかくモヤモヤを吐き出すのを3回くらい繰り返して（笑）もうここまで来たからどうにかなるだろうというギリギリのところでプレゼンを作って。その最後の追い込みと熱が、今にして思えばすごくよかったです。自分だけ

ではできないし、想いを言葉にしたり、人に分かるように伝えられるようになるまでには、やっぱり聞いてくれる人の力が大きいなと思います。

細川　僕は塾講師なので仕事が夜で、声をかけてもらっても、セミナー以外のブラッシュアップにぜんぜん行けなかったんです。だけど最終発表会前日の最後のブラッシュアップだけ、1時間くらい参加して。そしたら、もうみんな実際のプレゼンデータを映して時間を計りながらしゃべっていて、「あ、やべえ、みんなすごいな」と。これはやらないとやばいと思って「帰ります！帰ってやります！」って言って帰って。

一同　え〜〜！

事務局　すごいですね。

細川　なんとか体裁だけは整えました。あの時はすごいみんな頭抱えてましたよね。女子たちが泣きそうになりながらやってた。

小笠原　ちゃんと思ってる事を伝えたいと思うんだけど、ストーリーが組み立てられない、起承転結にならないな〜ってモヤモヤして。最終的にちゃんとまとまったのかどうか、終わってからも納得いかない部分はあったけど、やたらと達成感はありました。

事務局　現役生もこれから1ヶ月半後には最終発表会を迎えるわけですが。

関根　私は前回の第5回目で土台ができちゃって、ちょっとあぐらをかいた部分があったんですけど、事務局の人に「最終発表会までに1回捨てるくらいの覚悟で」って言われて。よく考えたらまだ1ヶ月半あるし、絶対に他の塾生はウルトラ C を使ってくるなと危機感を感じたので、私はさらにそこからまた引き離そうかなと。

一同　おお〜。

菊地　負けないぞ〜（笑）ウルトラ C やっていきましょう。

伊達ルネ塾のネットワークは、誰かが支えてくれる「ファミリー」

事務局　伊達ルネ塾に対して要望はありますか？もっと OB をフォローしてくれとか（笑）

庄司　また話聞いてもらいたい（笑）

事務局　話聞いてもらえなくなった？

庄司　はい。

小笠原　引き出してほしい、みたいな？

菊地　そっかー。

事務局　（小笠原に）若者を求めて塾に入って、若者には出会えましたか？

小笠原　出会えたんですけど、伊達ルネの範囲は広めだし、田舎なのでちょっと物理的に距離の壁があるので、もどかしいところはあります。

菊地　けっこうみんな忙しかったり、お子さんがいらっしゃったり、遠方だったりしてなかなか話す機会がなくて、寂しいな〜と思っていたんですけど、回を重ねるたびに少しずつお話できて。先日のセミナーでは、来てる人みんながファミリーのような感じがして、発表へのコメントもみんなしっかり書いてくれて、すごくいいな〜と思いました。

事務局　（OB に）「伊達ルネをやっていたことが今に活きてる！」みたいなことってありますか？

細川　地元のイベントや周りの地域のことに対してちょっと敏感になりましたね。塾生だったり、つながりのある人が参加してるとやっぱり気になっちゃうかな。

庄司　仕事以外での活動や地域との関わりが、前よりもいいバランスでできてきてますね。伊達ルネがきっかけで 20 年ぶりに同級生と再会して、去年一緒にイベントをやったんです。そうやって同じような想いのある人たちが集まってきて、事が起こる。いきなりどーんと変わるわけではないんですけど、ちょっとずつ変化が起こっているのが面白いです。伊達ルネがあったから、その動きの中に自分が入れているなと思います。

小笠原　「塾」なのでやらなきゃいけない雰囲気があって、定期的に自分のことを考えるきっかけになって、夜やったり朝やったり発表の前はずっと考えてたり、めちゃめちゃ苦しかったけど、その経験ができたのは良かったです。5回の講座で毎回プレゼンシートを作り直して発表するという経験をしたので、今も仕事でプレゼンをする機会があると、1回作っても違和感を感じたら作り直したり、ちゃんと時間内に納まるように練習したり、自分の一番言いたいことは書かずにあえて口で言うとか、そういう工夫もできるようになったのがよかったです。

事務局　学んだことが役に立っているんですね。

小笠原　はい。あと、仕事の中でも悩みがあったりすると、尾野さん（※2）に相談してみようかなとか、OB で詳しそうな人に相談してみようかなとか、そういう下心があって3期のセミナーを聞きに行くというのもあったりして。私のセーフティネットになってくれているなと。

事務局　若干距離はありながらも、若者とつながれたと。

小笠原　そうですね。誰か支えてくれる人がいるはずと思えるようになりました。

菊地　3年も続けてやってるとブランドみたいなものができてきて、名前で人も寄ってくるって尾野さんが言ってました。1期からお手伝いしてますけど、関わる人が増えてきてだんだん充実してきているなとすごく感じています。だから塾生じゃなくなっても関わりたいし、来年も再来年も楽しみです。

※1　伊達ルネ塾をきっかけに、山元町の洋菓子店で出張タロット占いをするようになった。

※2　塾長の尾野寛明。

みやぎ県南地域づくり実践塾 **伊達ルネッサンス塾**

発行
伊達ルネッサンス塾事務局（一般社団法人ふらっとーほく内）

編集・ライティング
谷津智里

デザイン
土澤 潮（デザイン事務所ペイジ）

写真
LUMIGRAPH（ルミグラフ）、さとうたいち

写真提供
角田市商工観光課、丸森町観光案内所、
山元町企画財政課、Petite Joie

助成
宮城県地域復興支援課「みやぎ地域復興支援助成金」、
特定非営利活動法人ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京

Copyright © 2017 FLATOHOKU. All rights reserved.
本紙掲載のテキスト、図、写真の 無断転用を禁じます。